「ありがとう西高！」新聞

発行元：「ありがとう西高！」実行委員会　広報室
Mail：nishikouarigatou@gmail.com
Instagram：nishikouarigatou
twitter：@nishiko_arigato
Hashtag：#ありがとう西高

西高祭を終えて、反響

前号でお伝えしたように、９月７、８日に行われた西高祭では、皆様のご理解とご協力の下「ありがとう西高！」実行委員会による卒業生企画が実現し、在校生をはじめ先生方や卒業生、地域の皆様に多く参加いただき好評のうちに幕を閉じることができた。先生方や在校生の皆さんからも多くの感想を頂いたので紹介したい。

卒業生の姿から、未来見えた

西高祭の長い歴史の中でも、卒業生が今回のような形で直接参加するという例はあまりなかったようだ。当初はいくつか懸念を指摘されていたが、結果としては入念な話し合いにより構築できた信頼関係により、西高祭当日のトラブル無き出展へと導くことができた。ただ出展するだけでなく、在校生主体の文化祭全体を盛り上げる手助けができればと、訪問者向けのスリッパ出しサポートなど、進行アシストを行ったことが学校側からは好評だったようだ。

後日の我々と学校側との意見交換において、先生方に本企画の感想を伺ったところ、評判は上々であった。「在校生は“体験型の催し“に対し新鮮味を感じていたようだ」という評判を聞くことができた。また、演奏会やトークショーも含めた感想として、先生方から「“各界で活躍する卒業生”と触れ合うことで自分たちの未来への道筋が見えたようだ」という言葉もいただいた。

体験型の催しは、在校生の参加も多かった

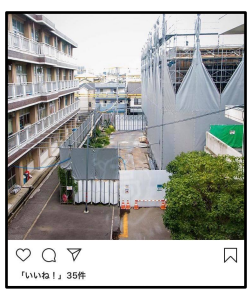
生徒からは「卒業生にこんな人がいるんですね」「こういう風になることもできるんですね」という声があがっていたほか、先生方からも「だから諦めちゃダメだ、と生徒に伝えられる」とコメントをいただいた。

これは西高祭当日の話となるが、ある卒業生は我々の活動をきっかけに数十年ぶりの来校となったと語ってくれた。彼女は「西高がなくなる話」を同級生が知らないのではないか、という不安を我々に話してくれた。

我々にとって、課題のひとつが改めて浮き彫りになった形だ。西高へ想いを抱く卒業生はまだまだ多いのではないか。より多くの感謝と敬意を母校に捧げるため、今後も実行委員会としての活動を続けていきたい。

公式SNS、西高の写真募集中

実行委員会ではTwitterとInstagramの公式アカウント「「ありがとう西高！」実行委員会」（アカウント名）を運用中だ。不定期ではあるが、西高で撮影した写真を投稿している。徐々にだが、フォロワーが増えてきた。



公式ハッシュタグ
#ありがとう西高
を利用ください!!

先月、反響が大きかった投稿は左写真

これまでの投稿だと、「新設工事中の校舎の写真」の反響が一番大きかった。引き続き投稿を続けていく。アカウントをお持ちの方はぜひTwiterとInstagramで「#ありがとう西高」で検索、フォローを。また写真提供も募集中だ。（連絡は紙面上部記載のMailへ）

2017年春、取り壊される直前に撮影

あの場所は、今
- 学生食堂篇 -

卒業生が語る西高の思い出は実に様々であるが、校舎や設備に関するものが多い気がする。例えば筆者にとって印象深い場所の一つが学食で、未だ景色が目に浮かぶ。教室から出ると一階に降り、渡り廊下を抜けるとガラス戸の入り口が見える。食券を買い、給茶機でお茶を汲み配膳口に並ぶ。うどんやそば、カレーも人気だったが、２種類の定食も人気だった。世代によって想像される内容が異なるかもしれないが、A定食は和食中心でやや高級品、対してB定食は洋食中心で庶民向けといった装いで、昼食時、記者のトレーにはだいたい後者が乗っていた。（記者 ＝ 2005年卒業）

学食に限らず、歴史ある西高ではどのような場所も、多くの思い出とともに時を重ねてきたはずだ。先日の文化祭では二十数年前の卒業生から、在校当時にもあった床の穴がまだ残っているという話さえ聞いた。

一方で校舎の外に目を向けると、新校のための校舎建設など大規模な工事が行われており、筆者の思い出が詰まっていた学食も、2017年の工事で取り壊されてすでに存在していない。変わり続ける西高の現在の姿に、思い出の場所はすでにないかもしれないが、その思い出を集めることで西高という場所が持つ記憶の結晶のようなものを作れるのではないだろうか。「ありがとう西高！」新聞は、今後も様々な世代の方から思い出の場所を聞き、それを軸にこの結晶の欠片を集め、感謝と共に残していきたい。　（石川）

大宮西高伝

友人と、先生方に恵まれた高校生活

丸山薫さん（ピアニスト）

ピアニストの丸山さんは、９月の西高祭で演奏を披露。単身ドイツに渡り20年以上、現地で活躍を続けてきた実力に、来場者からは、大きな反響が寄せられた。

５歳からピアノを習い、小学生でピアニストを志した丸山さん。なぜ大宮西高を選んだのか。西高時代はどんな生徒だったのか。当時を振り返ってもらった。

在校生へのメッセージはドイツ語で綴ってくれた（詳細は次号にて）

願書提出 1ヶ月前の決断

中学時代の丸山さんは、授業が終わるとピアノはもちろん、音楽理論など、いくつものレッスンに通っていたという。ハードな日々をこなしていたのは、理由があった。東京藝術大学附属高校へ進路を決めていたからだ。

しかし、試験の結果は不合格。私立高校の推薦枠もあったが、ピアノを優先的に続けらる、自由のきく学校はないかと案じていたところ、大宮西高が目に留まる。それは願書提出の1ヶ月前のこと。それまで５教科で受験することなど想定していなかったため、この時ばかりはピアノを休んで勉強したそうだ。

西高時代は 演奏の「糧」に

「すごく好きだった！充実した学校生活だったんですよ」高校時代を語る丸山さんの表情は明るい。「結果的に（東京藝術大学）付属高校に行かなくて良かったと思ってるんです」。10代後半を音楽とは無縁の友人と先生方の理解に恵まれ、普通科の生徒として過ごせたことは、現在の演奏活動に生きているからだと丸山さんは語る。

興味深いことに、ピアノの演奏は、ただ楽譜に書かれた通りに弾けば良いわけではないそうだ。「ピアノと譜面は、役者さんと台本の関係に似ていると思います」。台本に書かれた台詞は、役者の解釈を通して表現される。音楽も同じで、奏者が楽曲を解釈するには、経験に基づく様々な感情を知らなければ表現できないという。

西高での３年間は「感情の引き出し」を作る上で、丸山さんの大きなアドバンテージとなったようだ。事実、高校３年時の丸山さんは、埼玉県ピアノコンクール（現・彩の国埼玉ピアノコンクール）高校生の部にて見事、１位金賞に輝いている。

いざ本命へ リベンジ狙うも

高校卒業後の進路は東京藝術大学へと決めていた。その入試当日は西高の卒業式と重なり、丸山さんは卒業式に出席できなかった。仲間と別れの挨拶を交わせなかったことは、高校時代、唯一の心残りだったと振り返る。

残念なことに東京藝術大学への入学は叶わなかった。一浪の末、再び同大学を受験。しかし、またも不合格。二浪はできないと、私立音大へ行くことにした。「結局、縁がなかったんですよね」と丸山さんは苦笑する。

私立の音大に通い始めてしばらくして、丸山さんはある違和感を募せていた。それは「ぬるま湯に浸かっている」という焦燥感。だが、居心地の良さもある。「このままでも良いかな」そう思いかけていた。（次号へ）